

ブレイクタイム

今回は前に一回紹介した詩をもう一度、ゆっくり読んでもらえたらと思います。

ヘンリー・ワオンの詩「Affliction」(苦悩)より。

We're all the year (一年中)
One constant sunshine (ずっと晴れの日ばかりなら)
We should have no flowers (花を見ることはない)

年中快晴の日ばかりだと花は咲かない

雨の日があるからこそ花は咲くのです

どんな花よりも

名もない道端に咲いている

そして自分で咲かせた花

自分好みの花でいいのです

花の美しさを競う必要はないのです

自分好みの花でいいのです

—好きな花を誕生日に添えて—

私はこの詩を目にしたとき、「そうだ、その通りだと思いました。どんな大輪の美しい花より、あなたが自分で咲かせた自分の花こそが一番美しい花だ」と。比べる必要はないのです。自分好みの花でいいのです。

あるお母さんは、子どもに大輪で美しい花を咲かせてほしいと、いつも子どもに言っていました。それが母親の願いでした。そんなきれいな花を自分は咲かせることができるのだろうかと思問する毎日、できないかもと苦しくなることも。

そんなある日母親は玄関を出て、ふと足元の道端に咲いている小さな白い花が目にとまりました。誰にも知られることもなく、名もなき花ですがその花を美しいと思ったそうです。それから、母親は娘に大輪の美しい花をさかせると、娘に要求することを止めたそうです。そして、娘の顔に笑顔がもどったという話を聞いた記憶が重なりました。

やっぱり

自分で咲かせた自分好みの花が一番美しいのだと思っています。どんな花だってあなたが咲かせた花を「きれいだね」と言ってもらえたら、子どもは安心して頑張ろうと前を向けるのだと思っています。

“いじめ不登校そして…色鉛筆アーティスト「けい」とさんという記事を見つけました。(夕刊12/10) けいさんは小5のときいじめにあいました。人間関係に苦手意識があり「嫌われるのが怖くて」「中学校時代は、自分からは、友達とはほとんど話せなかった。」と 中3になると高校受験のストレスも重なって、不眠が続き、倦怠感や頭痛といった病状が続き、起立性調節障害と診断され、2学期からは学校へ行けなくなりました。

そんな時²⁰¹⁷で出会ったのが「写真のように、リアルな色鉛筆画」だった。僕の描きたいと憧れた。小学校のころから文字を書くのは、苦手で、授業中に板書を書くのを終わらせることができず、先生に怒られた。一方、形や色の再現は得意で、美術の時間は心の支えになった。(つまり、けいさんは、字を書くのは苦手だけど、絵を書くのは得意で好きだったのです。何が好きかは、その人によって違うと思いますが、誰にでも好きなことはあると思うのです。)そして、中学校を卒業して、通信高校で勉強したのですが、勉強よりも、²⁰¹⁷で知った色鉛筆画が好きで、1年を過ぎるころには、コカコーラのびんボトルの立体絵を描き、SNSにアップするとたくさんの反響があり、今では、2枚色鉛筆アーティストが自分の仕事になり、個展も開いているというけいさんの記事です。

昔から「好きこそ物の上手なれ」という言葉があります。その「好きなこと」は「まねぶし」ことから始まります。親がたのしそうに顔をしていることを子どもはちゃんと見ています。そして「僕、私もやってみたい」「おもしろそう」とまねするところから始まります。親が「これをやれ」と言っても心は動かないのです。親は将来のことを考えると勉強しなくてはと塾を選めるのですが、子どもは好きなことではないのです。けいさんも親に言われ通信高校へ進学するのですが、けいさんは絵を追求しています。そんなけいさんを見ているうちに、勉強ではなく、けいさんの絵を応援するように親も変わっていったのだと思うのです。子どもにとって親の応援は何れも増して心強いことです。自人力です。

どんな花を咲かせるかは、子ども自身が決めることです。親がどんなに大輪の美しい花を咲かせてほしいと思っても、それは親の願いであって、どんな花を咲かせるか決めるのは子ども自身なのです。そして、子どもが咲せた花(どんな花であっても)親が「きれいだね」と言ってくれたら、子どもにとってそれ以上のうれしいことはないのです。そんな思いで親が見てくれたら子どもは安心して自分の花を咲かせることができると信じています。

(花の美しさを競う必要はないのです)

(自分好みの花でいいのです)というヘンリー・ワーンの詩を送ります。

2025年元旦 竹内春雄 (2)